



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第六十二号（一日発行）
平成六年十一月一日

北海の古平風土物語（二八）

3. 津軽ヘントコさん
大正十五年・高等科二年 担任 千葉信夫先生

高橋 源 五口

この漫才を聞きに寄ってはは
やしたてる。あねさん。たちも
いて、鯨つぶしの時は大変賑や
かで楽しいものであったことを
思い出している。

この年の四月は三度も大漁が
あって、浜の仕事は大忙しの日
が続いていた。小学校の漁繁期
の休みも永かった。月末になっ
て、やっとのこと少し楽になっ
た。

× × ×
やがて五月初めになった。
津軽のヘントコさんは、わ
え（わが家）の畠仕事が始まる
からと、木造町に帰ることにな
った。

手間賃のほかに、九一（く
いち）特別手当に当たる割り増
し分）を貰い、また土産に、鯨
ぬか漬一斗樽一本、鯨外割（ほ
かわり）一束（五十尾ぐらい）

ほっけ外割一束、半干身欠鯨三
束（三百本）、干数の子手ぬぐ
い袋一本（約二キロ入り）、鯨
切り込み一升びん詰一本などを
背負ったり、持ったり、ニコニ
コと笑顔いっぱいであった。
「親方（父・小野寺源太郎）！
どもども、ござさん」
「あんさめえ（長兄・小野寺地
作）！ 津軽の湯コさ、まだ来
てけへえ」
「へんど（船頭）はん！ まず
めえ（松前）のとんつ（下船頭
はん！ らいすん（来春）、ま
だ来るえ、頼むねす」
「まずめえのおんず（次兄・小
野寺利助）さん、あんちゃ（私
のこと）、じよんぶで（丈夫）
でねえぞ」
「どもども……」
「こどす（今年）ア、まずめえ
から、田植えも、盆も、まづり

（祭り）も、しよがづ（正月）
も、いっしよずね（いっしよに
しよって来たえ）
と、最後まで、とんきような津
軽笑話を残して、木造のわが家
に帰って行ったのである。
賑やかであったヘントコ
さんの帰った後の浜は、寂しく
なった。

追記

1. 津軽・南部をはじめ、東北
地方の各地では、当時、祝祭事
や節気祝い、田植え時には、鯨
製品や干魚類の料理をする習慣
があると聞いていたが、ヘント
コさんの残した言葉でそれがう
なづかれた。
2. 『南部大黒』と『津軽ヘン

トコさん』を通じて、東北地方
の農家の男たちの多くが、古い
時代から、農閑期になると他地
方に出稼ぎして、国元の生活を
支えていたことがわかる。こう
した習慣は、この地方の環境、
経済状態が原因になっている。
最近の近代社会になった今日で
も、こうした出稼ぎが続いてい
る。一方では、出稼ぎによる悲
話も生じている。

3. 東北・北陸地方の人々の方
言やなまりは、古平でもよく聞
いていた。しかし、松前や古平
地方の言葉は、これらの地方の
言葉が混じりあってできたもの
であり、また、独特な方言があ
るように思われる。

鯨漁場の給料

仕事	給料	前借金	差引残金	入船町・ 田岸出張漁場の帳簿から
船頭	一五〇円	六〇円	九〇円	総勢三〇人 の中から仕事 別に八人を抜 き書きした。
副船頭	八六円	八〇円	六円	給料総額は 二三八九円で あるが、この 内、前金とし てすでに渡さ れているのが一 八四四円で、 漁期が終わっ てから手に入る のは給料の四分 の一に過ぎない。 この年は大漁 で五分の配当 があった。
起舟手伝	八一円	六九円	一二円	
磯舟手伝	七七円	五九円	一八円	
磯舟手伝	七八円	六四円	一四円	
陸廻り	七七円	五九円	一八円	
飯炊	七四円	六四円	一〇円	

開拓の村にのみがえる 旧近藤医院に寄せて

札幌市厚別町にある『北海道開拓の村』に、当町の旧近藤医院がそのまま保存されてことをご承知の方も多いと思うが、今でもときどき古平の方が見学されて、そのうわさを聞くことがある。私の近所だったので、やはり懐かしい。

古平町で医療に携わってきた近藤清吉さんの洋風建築の医院と、文庫倉が特徴で「大正八年

故郷を想う 福井孝平

建築、木造二階建」と、説明されている。

先代・清吉先生については、これという印象もないが、二代目・雪一先生とは、町内会長や古中PTA会長、そのほかにも公職を引き受けられてご活躍されておられ、なにかと親しくさせていただいた。

当時、古平町にもテレビがようやく普及し、町内では一番早かったので、相撲の時になると町内会の主だった方々とよく見

さしていただいた。世事下々の俗習にうとい、純粹な、尊敬できる理論家であったことだけは鮮明に残っている。

札幌へ移って開業し、その後何年かして、故人となられたと聞いている。当時では早かった原動機付き自転車に乗って、往診されていた後姿が思い出される。

かつて医院の建っていた空き地には、今年もまた、立葵（ちようちんばな）が見事に咲いている。

院跡の野菜畑や立葵

※ 昭和五十七年、『北海道開拓の村』に医院の建物が寄贈され、移築されましたが、そのほか『北海道開拓記念館』には、親子二代にわたる一万数千点という膨大な資料も同時に寄贈されました。

今年の春、この内の五百五十点が「近藤医院資料目録」として刊行され、今回、その目録が越野清治さんから町史編さん室へ寄贈になりました。ありがとうございます。

主人が語る 昔の和船の思い出

渡辺 ハツエ

「腕と度胸」に生きる、海の男たちの船出――。

厳冬の海に、櫓（ろ）を漕いで漁場へと向かう。風のある時は帆を掛けて走るが、それは、まさに「舟は帆まかせ、帆は風まかせ」である。舟が波を切つて走るときなどは、それこそ鼻唄まじりの気分であるが、海は穏やかなときばかりではない。

風の強い時などは、帆の操り方が悪いとたちまちひっくり返るはめにあう。船頭さんは、いつときたりとも気がゆるせないのである。漁場への往復、帆を掛けて走れば、その日の漁獲の半漁は帆のおかげだと喜んだものだった。

今のような立派な築港もなかったころは、神楽機（かぐらき）を陸に巻き揚げる道具（もぐら）を使って舟を巻き揚げていた。漁を終えて帰る途中に時化てきたりすると、舟を巻き揚げるのにずいぶんと苦労する。そんな時は、男も女も総出で、隣近所が

お互い助け合って舟を巻き揚げる。時には、波をかぶって水舟にしてしまうこともあったが、当時は、このような漁民の助け合いの組織が徹底していた。

また真冬には、漁を終えて帰るころは夜になる。吹雪などで一寸先も見えないようなときには、留守をあづかる家族は近所同士が誘いあって、通称「先の浜」へ集まり、たき火をして、舟が無事に自分の浜に帰れるよう誘導したものだ。

今ではいろいろな機械が発達して、セツトさえしておけば、船頭さんは寝ていても港に帰れるような装置まで出来ている。

昔の海の男たちは「板子一枚下は地獄」といわれる、荒海での労働と苦労を惜しまなかったという。

私とは年齢が一回りちがう主人の、遠い昔話をつづってみました。



遙かなる故郷の思い出 2

橘 美我 春

あぶらこの話 (二)

「ちくしょう！ お前なんかには苦労して採った餌がもつたないよ」

と、ベロカジカに八つ当たりしながら根気よく待つていたら、やがて「ゴツン」と、軽い当たりがあった。さおを上げてみたら、シオ虫の餌が喰われて無くなっていった。また、ベロのやつかも知れない。今度は、餌をガニツブに代えて針を海の中に落した。

と、とたんに「ガックン」と強い当たりで、さお先が海の中に引き込まれた。なおも「ゴツン：：ゴツン：：」と、すごい引きだ。これはベロではなさそう。こんぶの茂みの中からなかなか上がってこない。逃がしたら大変だとばかり、さおをほおり出して、釣糸を手を持って強引に引き上げた。ようやく岩の上に引き上げて見たら、まるまると太った、一尺(三十センチ)もあるような大物のあぶらこであった。やっぱり昨日見た

のはこいつだったのだ。パンザイを叫びたい心境だった。

こんな大物を釣ったのは、生まれて初めてのことだ。うれしくてうれしくて、もう帰ろうかと思つていたところへ、ちょうど悪童仲間が泳ぎの支度をしてやつて来た。

釣り上げた大物のあぶらこを見て、「これ、ほんとうにお前が釣つたのか？」

と、びっくりしていたが、そのとき何か悪い予感がしてきた。悪童連の中のボスが、あぶらこを見ながら欲しそうな顔をしている。案の定、

「なあー、俺サ、そのあぶらこ、これや——」

「このあぶらこだけは駄目だ」「なして駄目だ。したら半身だけでもくれ」

「そつたらご言つてもわがネ家さ帰つておら家のジジさ見せるんだ」

と言つたら、どうやらボスもあきらめたらしく、もう「くれ」

とは言わなかったの、ホットした。実はこのボス、赤犬の大きいのを飼つていて、それに食べさせたくてしつこくねばつたらしい。

家に持つて帰つたら祖父が目

を丸くして、

「おめえ、ほんとに一人で釣つたんだべな」

「ンだ。おらアうそ言わねエ」

「えや(餌)何つくだ」

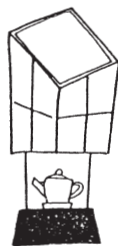
「はじめはシオ虫で、あとがらガニツブついで下げたら、すぐバグッどきた」

「うんだが、うんだが。おめえは、やっぱし俺の孫だけのごど

はある」

祖父は、孫が釣つてきた大物のあぶらこを見て、もう上機嫌だった。

その夜は、釣りの名人の祖父にほめられ、しつかりいい気分であった。そこへ、祖母が焼き立てのあぶらこを持ってきてくれた。あつあつのあぶらこに、ジュウーと醤油をかけて食べたが、そのときの味は、今もって忘れることはできない。



石碑を訪ねる

墓地通舗装竣工記念碑

文化会館の裏、墓地へ抜ける丁字路の角に、草に隠れるようにしてこの記念碑が建っている。

古平小学校第三十一期生で、当時、代議士であった寿原正一氏が故郷の墓参をした折、そのご厚意によって、道路の拡張と全面舗装がなされた。

これに感謝し、その遺徳と功績を明らかにする

昭和47年8月竣工
延長265M
この舗装工事は本町出身の寿原正一先生が郷土に眠る人々の霊を慰めるために寄付施工されたものであります

昭和47年8月10日
古平町

大正から昭和初期にかけて

私の見たにしん場風景

2

網下ろし

竹内 コト

鯨場の準備に忙しい三月に入ると、各地の鯨漁況の予想が盛んに伝わってきます。親方は親方で、神社やお寺のおみくじを引いて来たり、自宅で一生懸命に『鯨占い』をします。「当たるも八卦、当たらずも八卦」と言いますが、とにかく、いい卦が出るまでやるのです。最後になると親方も、

「これだばア、毎年大漁だべエー」

と、苦笑いしています。三月も下旬になると、なぎの目をみて網下ろしをしますが、その前夜に、網下ろしの祝宴があります。これはどこの番屋でも、大漁を期待して盛大にやります。

番屋の板の間には大きな炉があります。船頭さん、そして炉の左右に脇船頭を始め役職者が並び、若い衆がそれに続いて座ります。親方は、大きな神棚にご神酒

を上げ、安全を祈願します。それを下げると船頭に渡し、みんなでそのご神酒をいただくのです。船頭以下若い衆まで、この日のお膳には、三平皿にはあったかい汁物、焼魚、刺身、小皿や小鉢物など、ご馳走が並びま

【今日日はこんな日】

紀元二千六百年を祝い 戦争への意識を高める

[昭和15年]

昭和十五年は『日本書紀』にある、神武天皇が即位してから二千六百年にあたることから、全国で『紀元二千六百年記念祝典』が行われた。

この年はこれを記念して、東京でオリンピック大会が開かれる予定であったが、中国との戦争が長引き、次第に国民生活にも戦争の影響が始め、国としても、何か明るい話題が必要で

す。私が一番先に目についたのは、特製の大福餅でした。この日ばかりは、ふだんから出入りしている女の人たちが、料理作りに呼ばれます。

祝宴になると船頭のはやしで若い衆がねじり鉢巻で踊り、歌う者、さかんにしゃべる者、大声で笑う者、この時ばかりは、上に下への大騒ぎになります。近くの子どもたちはこれを見物しています。子どもたちにも大漁を祝って、お菓子などをくれたりします。

あった。

東京では十一月十日、宮城前広場に天皇・皇后両陛下が臨席し、五万人が参加して盛大な式典が行われ、それから五日間にわたってお祭りさわぎでこれを祝った。

全国でもこれにならって奉祝行事が盛んに行われ、それまで禁止されていた、昼に酒を飲むことも認められるというご時世

網下ろしは、だいたい同じころに日を選んでやりますから、近くに番屋があると、そこからも賑やかな様子が聞こえてきます。すると、こっちも負けずとまた大声を出します。

茶わん酒を飲んでこんなで大騒ぎするのは、後は、大漁して漁を終るの切り上げの時だけです。その親方によって、酒やご馳走にも大分差があったようでした。

であった。

古平小学校でも同じ十一月十日、午前九時から全校児童や、町内からも多数の参列者があって、式典を行い、旗行列をしながら琴平神社に参拝をした。

また午後一時からは、恵比須神社で一般の人々が集まって奉祝式が行われたが、遠く稲倉石からも三十余人が参列した。藤田町長の発声で万歳を三唱し、午後二時散会した。

これを祝って全国から募集し当選した、奉祝国民歌『紀元二千六百年』はレコードとして発売され、この年のヒット曲となった。「金鶏輝く日本の栄えある光身に受けて——」思